

骨董集上編中之卷

○名古屋帯

文祿前後より寛永の頃までの古画と云ふ男女ともに絲と絹と一繩と似たる
 向よりみ縫とつけたるといくもかきまいて帯にまざる体ゆゑと云ふ其色の
 白あり紅あり青黄赤など成体にて彩色と云ふもあり按て是れいゆる名古屋
 帯あるべし昔肥前の名古屋よく唐糸とて組するゆゑ名古屋帯とて
 又組帯ともいひしと或人いふ和名鈔腰帶類云緋帯和名加良織絲為帯也
 とあり加良美の韓組とて名古屋帯は此韓組帯の遺制とやある又源氏
 梅枝の巻ふ「たんのし〜〜〜」とて云ふるも此巻物の紐をいふ
 和名鈔服玩具云「四聲字苑。綵青而黄也」の文祿前後に古画に青黄
 赤かといふりたる組帯ある是則綵れか〜〜〜帯なりと云ふ

江戸

醒と輯

三件屋

三件屋

三件屋

今も——の僧九帯とて式正のものとして——の組の帯は僧家まで用ひ
たり。既ふ利休の像と画くは組の上と道服の上と兼せり。十二三年の比は作られたる
御伽婢子 寛文六年瓢水子浅井 卷之二十六「天正年中越前敦賀に金銀を
かふ持する商人一人は男子と持するあり其隣に住有徳なる商人の娘と娶て妻と
す」と云ふ。按これ原 剪燈新話の金鳳釵記と翻案したる物語なり。金鳳釵
真紅撃帯にうつらうて天正年中これ——たる當時此帯より用ひたる事寛文乃
比をもいひつゝたるゆゑあつたなり。一洗に依り

○火燧 一

火燧とはふしは近古いれざるものなり。火燧のなり以前は物に尻けて火鉢を足で暖
たり。古き繪巻は其体と名けりあり。一は眉なれ左ふ拳出たり。

下学集 文火燧は名目見え。尺素往來 不竹煖生炭才。宋 煖は風をこぼすなり。

て火燧のこころをいれ文安文明乃比まを火燧といふなり。一は

饅頭屋節用 文亀中初刻 詞花堂藏本 「火燧火踏」はこれなり。一は

以後いふて一はあつたなり。○今も唐土より此方へ火燧の如く炉上は様とて衣を
覆ていふていふなり。清俗紀聞 冬は手炉と用ひ極寒中は手足冷する時に脚炉

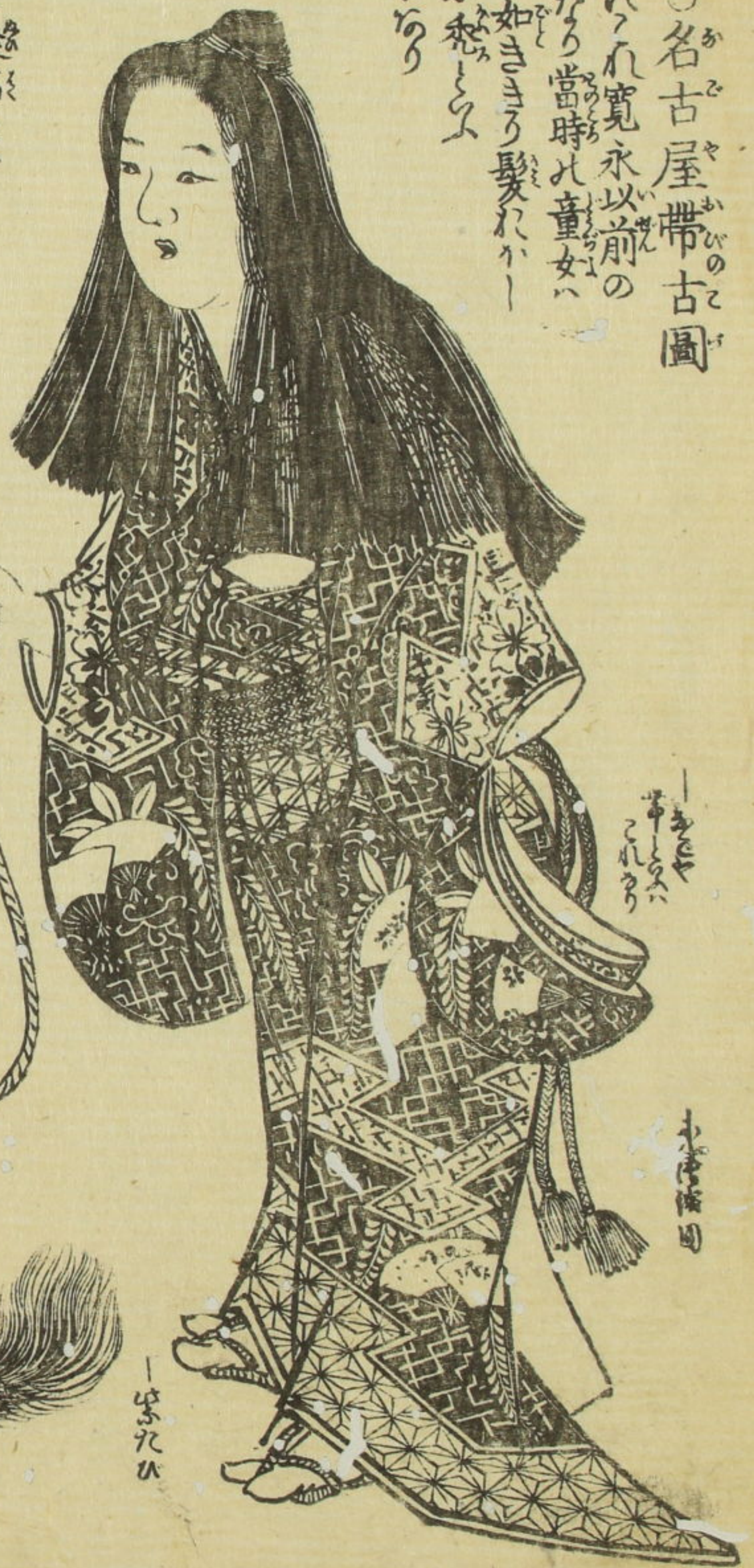
火とて灰と覆ひ椅子の前或は睡床の前は並て足と其上は並て温る云々。地炉
石炉といひく此方の巨燧の様は地は炉と拵て置りあり。これ南方温暖は土地

用ひていふなり。○行厨集 煖手者曰手炉。煖足者曰足炉。清俗紀聞 小
火は是なるなり。○或は按は火燧は地火炉のなり。一は地火炉は宇治拾遺 小

火とて又 奥列後三年記 永保の比陸奥に地火炉ついで。このなりありしは成記に
いふなり。此地火炉は制りて火炉と名を火炉といひは様をつくりしなり。

やがらなり。一は櫓と名づけしなり。戦国の時比制りてあり。人其居は
櫓に形に似たるゆゑに名よへり。一は

○名古屋帯古圖
 按るに、寛永以前の古画なる當時の童女の如き髪を、
 中多ふ、髪を、
 名あり



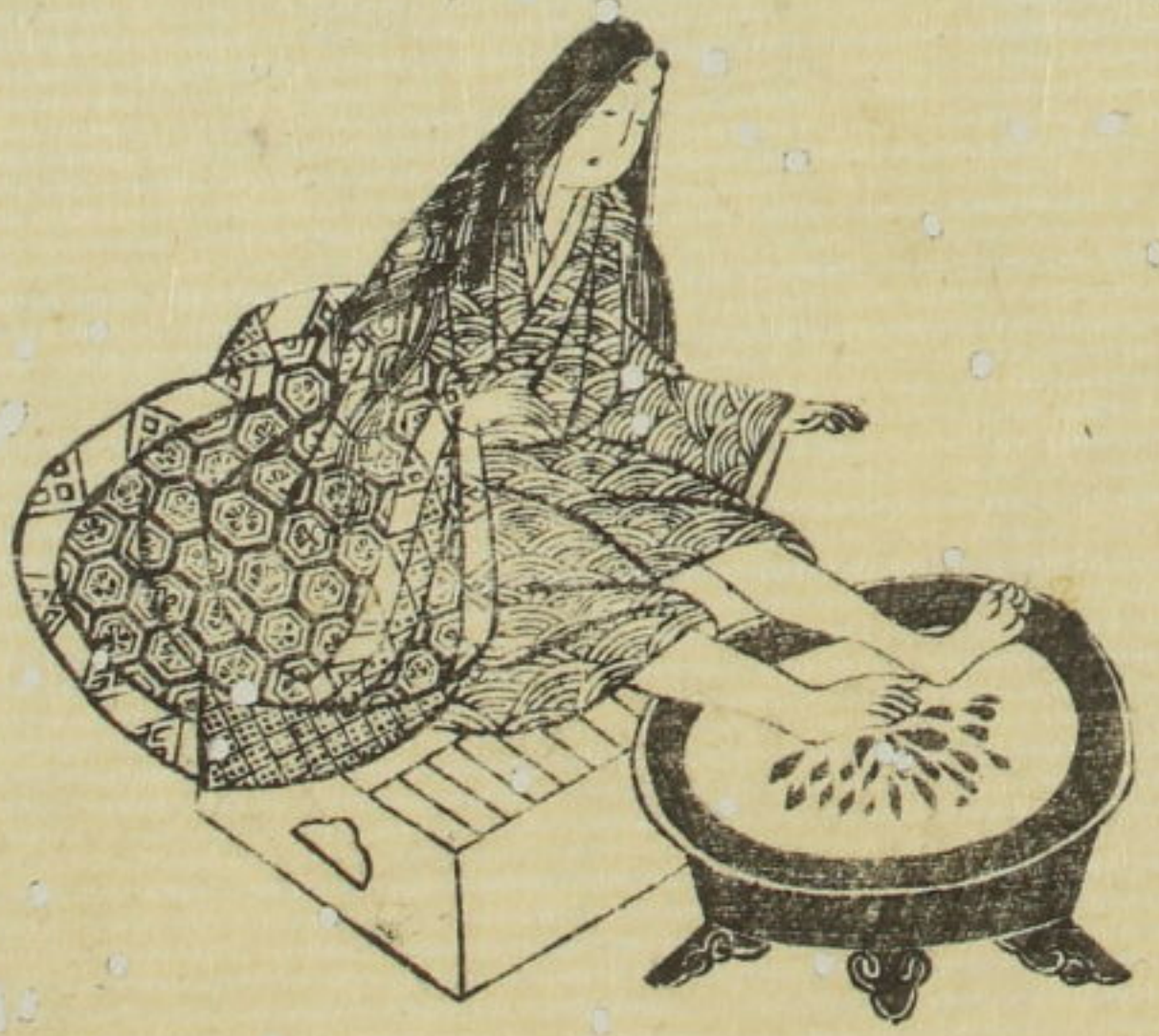
○衣服の縫落よて
 紫華の足袋と、
 二百年前の古風
 眼前より如く
 ○此時代の繪と、
 婦女の衣服は、
 此の如きものあり、
 威儀のたゞり、
 衣あり



由尾庵所藏

○寛永二十年印本
 移りみ相續
 富るに、
 履子の蒲團と打つて
 ○又寛永より明曆の
 比の俳諧の句
 彩火焼しつゝ、
 赤ひれ、
 かる櫓の号い

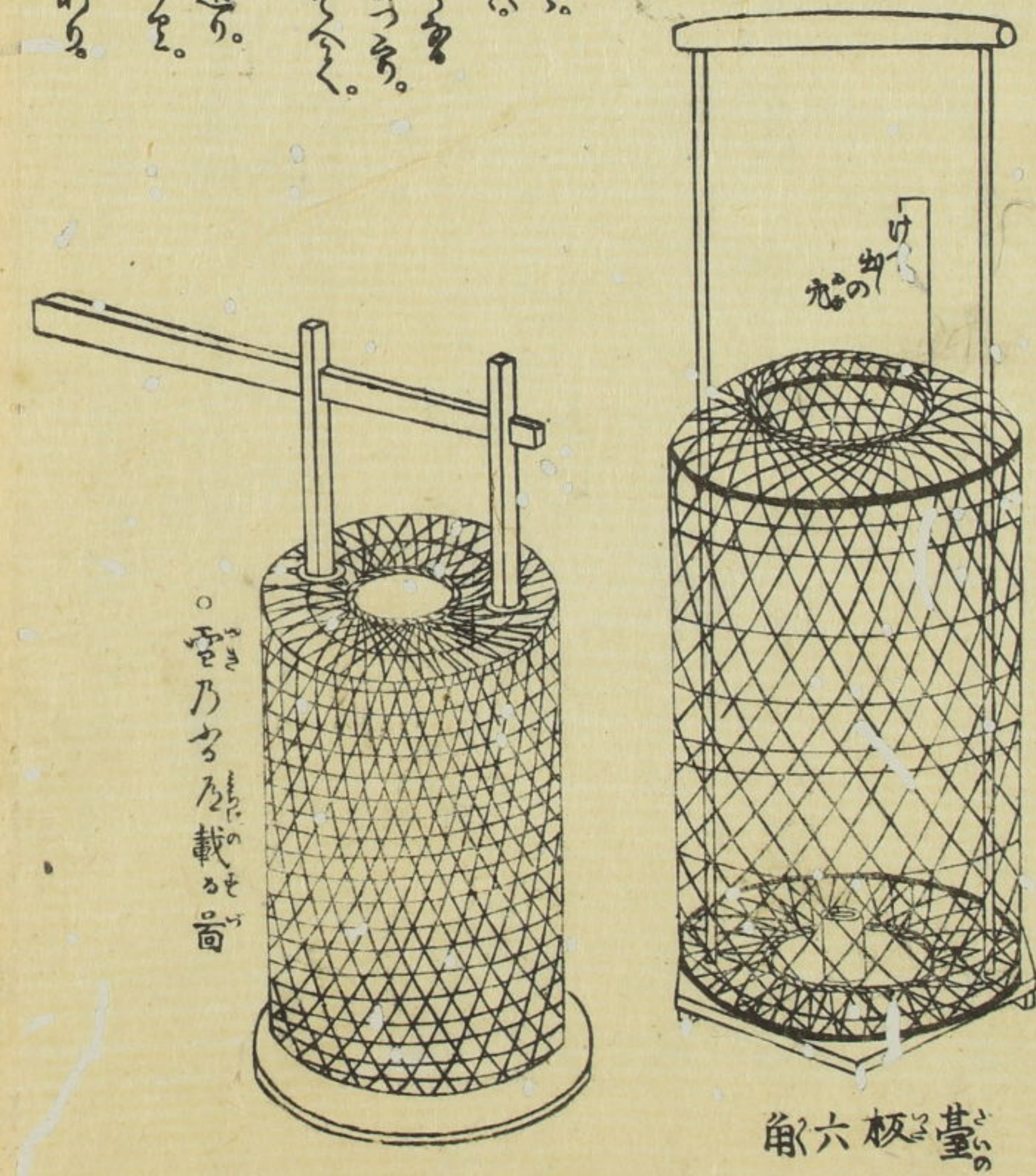
○文明以前火焼
 此れ時代火鉢を
 足と、
 寛永より、
 載たり
 細花堂藏



○かじやき
 鰻鱺は樺焼へ其焼たる色紅黒、
 他は鼻ふ入れ謂なるべし、
 鰻鱺は香疾よく相当する名あり、
 鰻鱺と焼

○羽列籠挑燈圖
 羽列籠挑燈の形
 天正以前の挑燈は古製と云ふ
 べき物なり形の異同大小も
 いろいろありしを得る
 ものと雪のふ。道に載る
 の成臨いどなり
 古製表れ今に
 のれん。ト

○寛文七年印本
 水鳥記
 野載
 元禄五年印本
 胸箒用野載
 寛文六年印本
 訓蒙呂圖
 野載
 元禄十五年印本
 諸藝大平記
 此圖あり
 當時の如く
 箱挑燈
 此の今あり



○總高曲尺二尺寸余
 籠高一尺二寸余
 用紙と粘り
 ○籠の口
 ○籠の口
 籠の口は火ととも
 やつらう其板は竹筒と
 立て右の松やうらうと
 なる料しん

○西鶴大鑑
 貞享四年板
 巻之二は杖挑燈
 といふ名をそしる是る也
 ○元禄八年
 印本
 姿繪百人一首
 野載

○延宝の比
 元禄未だでりし
 柄はつらう箱挑燈
 當時は冷めりし
 一二と
 あり

○寛文七年印本
 水鳥記
 野載
 元禄五年印本
 胸箒用野載
 寛文六年印本
 訓蒙呂圖
 野載
 元禄十五年印本
 諸藝大平記
 此圖あり
 當時の如く
 箱挑燈
 此の今あり

○元禄五年印本
 胸箒用野載
 寛文六年印本
 訓蒙呂圖
 野載
 元禄十五年印本
 諸藝大平記
 此圖あり
 當時の如く
 箱挑燈
 此の今あり

物とてよく知るべし其製作は歩く便にされ元家内と名をよみ造出する
 もれよりゆきとて一遷生八牋 小有柄曰行燈用以秉燭と有り唐土に行燈は此方乃
 挑灯れとひり

元禄二年印本
 本朝櫻陰比事
 所載番



○今茶人此用
 露地燈と云ふ
 此これと似たり

當時近き所方とありくはの如き
 行燈は月ひら今も諸國に流行し
 用ひ玉わくゆりとも二十四五年前の
 上野の旗行で一の宮に迎はれぬ
 行燈と用ひたる京都市にあり
 これとて形に似たり

○笠下ふ布と垂

秋齋間語 宝曆三年印本
 卷之二 小亭禄二 是れ古画と載り左に如し 今案る主人は女
 祇衣やれぬふ市女笠と云ふるをフの女下女ハ手ぬひのそと死一ひし
 布と頭は共ふ笠とありたり 職人歌合の女乃頭はまき布ハ別る

秋齋間語
 所載亭禄
 二年古画

亭禄二年と今
 文化十年より
 廿二八十五
 年此昔なり當時
 の女ハ此體
 カル此畫密画
 云ふはこれ
 ありと

亭下假名
 秋齋間語乃
 亭と幕

一向ノ下女ノテイ
 ナルヘシ袋ヲモタ
 スルハ古風ノ一

ソハツカヘスル女トミヘ
 タリ下女ハカミヲサケ
 ソハツカヘテイハカミヲ
 サクルトイヘトモカ
 ツラハカケタリ

主人ノテイ 今テ
 カツキテイノモノヨキ
 タルカウニキタルハ大
 ウチキノテイトヘタリ
 市女笠ハカミノソコ
 サルタメカ



○桔梗笠 八

天子草	寛永十年刻	母の櫻のや花より	衣	桔梗笠	徳元
毛次草	正保四年刻	さく花のよきと也志め法	桔梗笠	笠	吉政
玉海集	明暦二年刻	花やうで雨のひくくや	桔梗笠	笠	喜雅
口舌似草	明暦二年刻	花いけの鳥をゆくとや	桔梗笠	笠	作者不知
物志草	明暦三年刻	母花ひや海のりうバ	桔梗笠	笠	蝶こ子
歌後集	寛文五年撰	以上六部狂歌堂藏本	桔梗笠	笠	作者不知

右れ如くふるに俳諧れ句集に桔梗笠くくくふかおれを當時かきりれる笠ありむ
 とおれひのれいふの形れものともまきりり左の古圖と得て其形を知ぬ。又
 山れ井 慶安元年刻 小も「桔梗笠くくく河れ心花れ教くくくも人目あふれ草のれり
 著作堂藏本
 ともいひの 云く「ともんそくろ」○今も羽刈秋田船越天王比船衆に左に圖れ如き笠とあり
 桔梗笠れかごりるるる

桔梗笠古圖



貞享の比の繪、此箇のり
 大神樂打の
 体之

天和貞享の比れ幼れ乃繪卷の
 うらふ此箇と載たり笠は青黄赤
 一箇あきんいらん



大神樂打の
 少年の体之



元禄の比れ
 繪、此箇
 此二人
 美少年乃
 親子の体之

○又享保十一年竹田出雲作伊勢平氏年々鑑より浄瑠璃と大津繪の十三
 佛といふこととてを宝永の比もそのの仏繪を用ひ享保に比まぐも在り昔に
 此のあふるを今へて見るとかゝるに或人此を以て模しとたふすや
 但今も大津小仏繪多しといふも昔に比しはるかに少しなり

○因小云一代男

天和二年印本 詞花堂藏本

卷之三小寺泊れ傀儡の家れまといふ条は「風乃

押繪とて心花くげく有能なり人形板木押の弘法大肝胤は嫁入徳念園

大東の多門店左門が連奴これと大津追分とてくものぞうりる都か

のくも云い「か」をて天和比の戯子繪とていふあり

○又五ヶ津の草紙

刻板元年号詳かたしとて
 案ふ天和貞亨に比する

卷之四「虎梅竹左字とてく

枕屏風追分繪は奴が毛の命と君ふれいしく赤丹してあつる両段とて「とあり

是等と按ふ今又昔と失はるるもの大津繪と昔とあふりぬる女は女の

花のさかるとてさかたなり塗筆はとて「ふ」
 又此の繪は清浄のひがら板に繪しぬる
 此のさかるとてぬる繪は昔とていふ

大津繪佛像縮圖

總長曲尺二尺七寸
 廣七寸五分強

頭と両手は木ふりて印の外は筆
 丹蓮華あり

白



藍色

一枚の紙上下中一文字風帯此形と彩色
 ちよけて掛軸よもるりのあり

芝峯軒所藏

本居徳圃

同三尊来迎佛

此は黄土輪後牡丹蓮華丹緑青
雲朱墨寸尺ありし林前におあり

尚志堂藏



右に諸士百家記に云く是る龍関と云ふ
狂歌や三尊像も此より多し

四尊
指法

元禄三年印本

東海道分間繪圖牙載

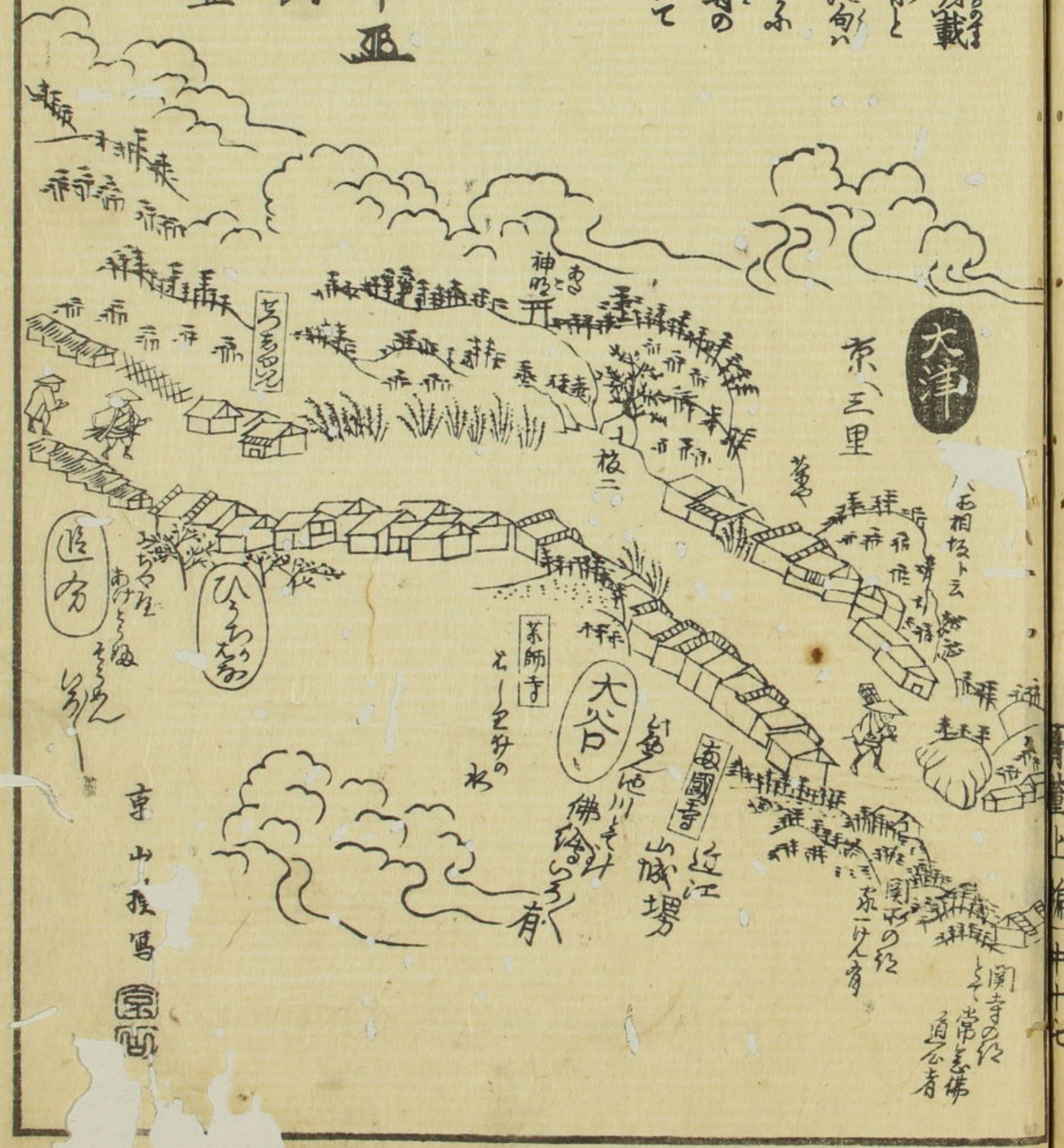
大谷に云く佛繪はく有と
とらり芭蕉比大津繪比句
元禄四年の板行なり當時の
おもつけ月比人ふうて
とらふは

奥書ニ云

作者 遠近道印 巫

繪師 葛川吉兵衛

元禄参年 庚孟春吉直



東山後寫

近方

ひらた

大谷

近江

大津

京三里

○浅葱椀 十二

昔浅葱椀と云ふ物有り 右之双紙 慶安二年印本 卷之上より青と相れぬくとの条より

此繪の河打と云ふは、人の河さきこさき云々、御器 一と云ふは、慶安乃に既のりし物を

雍別府志 貞享元年共三年上梓 土産門云々「二條の南北新町所製縹椀と云ふ。黒漆比上

色并赤白の漆と以て花鳥と昼云々」原書漢文 今其制作と知るべし 二代男

貞享元年 卷之四小富の老の事と云ふ条に「京の如く然とむとて相の静なる向ひ

流下敷敷二百人前の浅黄椀三町と云ふ 牡丹島と云ふ我ら此自由の花車と云

て有りき鼻も人ふくも 狀も夢見く居てと云々」元禄七 浅黄椀の下品乃器小

晋子十七回 氷と著 享保八年刻

前名 子ふらんやーと乃のひまを生 卒秋

附名 名ふれ似どぬきとをぬれ浅黄 雪点

骨董上編中十八

御伽名題紙 元文三年印本 卷之二小浅黄椀と云ふ、これと元文の比をせり、もの

今いさそく名どふ聞えん、ゆゑのりか昔のり用ひする是れ今とてなれもの

いとおやー

○重箱 硯蓋 十三

或書小重箱の慶長年中重箱の食篋よりつづきて始て製造 正と云ふは

び。今按るに重箱の衝重の遺製あり、衝重比制つて縁高と云ふ縁高比足と

しつて重箱と重箱と云ふべし、古重箱小看相と組入松枝かきりりの衝重と

看相と組入る飾と畧するの、ゆゆ衝重も終つては、古のりは、ゆゆ比手ゆ

ゆ、但食篋比号の重箱と云ふ、古のりは、ゆゆ衝重も終つては、古のりは、ゆゆ比手ゆ

衝重、縁高、食篋比名と知り重箱と云ふ、尺素性也、明文は、食篋と云ふ重箱

比名、ゆゆ比手ゆ、右比或書小重箱の慶長年中始つてつづき、ゆゆ比手ゆ

ゆ、ゆゆ比手ゆ、既小文亀本比、饅頭屋節用、重箱比名目、ゆゆ比手ゆ、ゆゆ比手ゆ

狂言は菊の花と云ふ「時」も先盛と扱へられた。でこつたべへし様トて
わきだれをばつてと云ふかゝるていさふ。さういふ様構かまきり治れ重箱と云ふは菊
と云く扱へて出ゆ「たき」といふも有り。又鈍根草と云ふ狂言「おぼろ」もこれなり
「おぼろ」は「おぼろ」の今より能の狂言のみうたへる前もこれなり。そ寛永
これより元禄は比まの古画或は印本は繪かごと参考する酒宴と看と盛盛の
と云て重箱之松檜草花かどふも「さ」と盛り食善鉢かた盛るふまは
りも今この硯蓋ふふのいと近年は造りたるのや古き繪又見んを
○元禄十印本は繪重箱より硯蓋か「卵子酒」宝永六年作れ繪ふ硯蓋より
七年の重箱も交へてあり自笑は草紙宝永七年板は繪ふ硯蓋のより重箱なりこれより後
西川祐信の「けい」印本は繪かごと「のま」も硯蓋のより重箱のありて重箱のありて
りそれより重箱と看と盛しん元禄は未だすれて硯蓋と盛しん宝永年中
始「し」のり「個硯箱の蓋」葉を「然」るも「古」記録或は歌集かふんをさ

山の井

慶安元年印本

卷之五ふ新黒谷は花見の事と云ふ「糸」のやある硯箱は此物の
よふものといふまは「ひりふた」も「さ」も「ぬ」も「こ」も「い」も「ゆ」も
扱へるは「体」として「の」と「お」も「近世好事は」葉と盛り「い」として
硯箱は蓋と看と盛し「始」として「つ」も「一」種は「物」に「り」な「る」も「さ」も
硯蓋は式正不用も「第」は「わ」る「今」民家も「正」月屠「蘇」酒は「看」と「重」箱と「盛」
へ宝永以前は古風は「残」も「る」も

三足猿

支考撰。上梓は年号なり。按るは宝永に比るべし。著作堂藏本

蘭小

硯蓋ふ菓子と盛るも「近」は「み」も「さ」も
強ひて「食」も「硯」蓋も「菓子」も「つ」も「り」も「て」も「結」の「ゆ」も「さ」も「ふ」も「け」も「り」も「さ」も「る」も
みり「の」も「り」も「硯」蓋も「干」も「子」も「盛」も「り」も「し」も「葉」も「盛」も「り」も「さ」も「る」も「い」も「れ」も
着と盛一種は「葉」扱へ「り」も「宝」永以後は「半」も「今」も「さ」も「る」も「形」も「出」も「て

本朝諸士百家記

宝永五年印本

卷之五

硬蓋し称え原とす一の如し

○二足三文 十四

今物れ價の安き故二足三文とす誘へ元金剛れ價よりせり
刻梓の年号ありて此寛永の 下之巻より金剛二足とす三文とすの云々
昏しとすびとせ流り 杏花園本
狂歌と載り金剛の草履れとすひたり 蘭金剛藁金剛板金剛種あり

○三線鼓弓れ古製 十五

松比葉 元禄十 永禄の比琉球より地皮二絃れ楽器と後泉州堺の琵琶法
中小路より者一絃とすて三絃とすと世に呼寛永より盛
わかられとす一とすり左に摸出せり寛永正保比の古圖之永禄より寛永
つうてとすり六十余年たれ古製と存今大異二づれの比より古近は
名匠とす今之形ふはとすりて ○鼓弓れ古製も左に出とるなり
○元々ひの成主とす三線へ何れも今之とすりては老けりなり
そはゆきとす 撰れとすり今と異なり元琵琶法に比せりてとすりて

萬治年印本

東山 撰寫 十四

寛永正保比乃古画なる三線の古製とすなり
美少年の男子の体



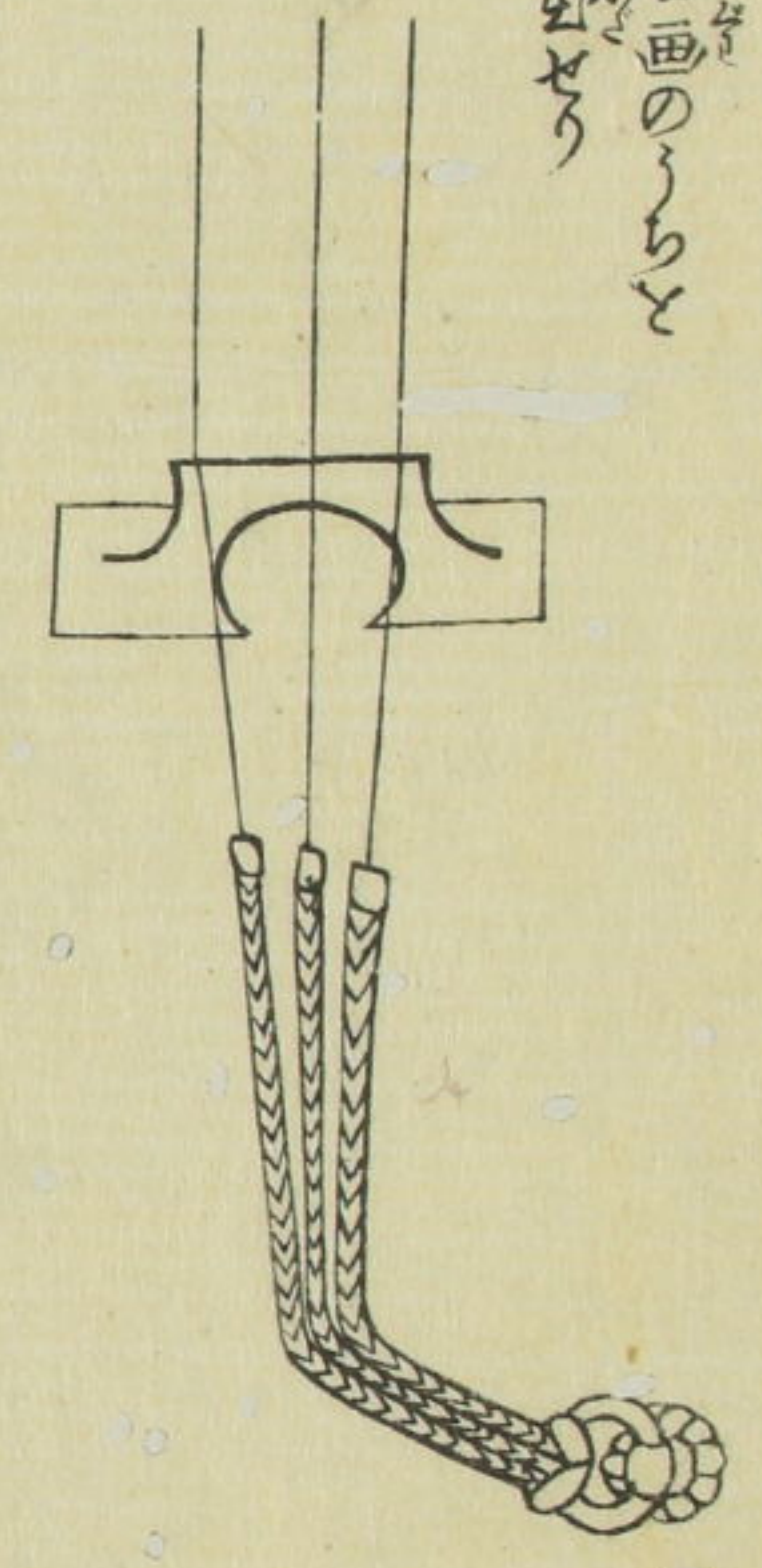
海老尾の形琵琶小
似たり今と大異

万治年印本
東海道名所記
所載

万治の比も
くのりた形



寛永永比の古画の通りと撮要して摸出せり



○根緒さす金とつけたりこれと異之盲人の撥糸とつけたり此撥は昔に質朴と



換の形
今と大
異後よる
ひりくつて
古製は撥へ無用
扱はたりしゆは婦女
掃枝はかりしとて頭よきなり
とて説くは

○寛永正保比
比れ古画なり
鼓弓は古製
今と大
異之
和漢三才図會
鼓弓始於南蠻
今と大
異之
○四以古製靈絃二近



○紫革足袋 十六

和名鈔 今按野人以鹿皮為半靴名曰多鼻（野鹿皮）此單皮二字乎（鹿皮）

足袋の革よく製るが元なり昔（應仁前）の貴賤男女すべし革足袋と用ひたり文祿乃

比れ古画より見るに小襪の紋ある革足袋と云ふる男子有り紫革乃足袋と女子

と云ふる（室町殿日記）十之巻長一の奥方用ひて云々と云ふと云ふ註文乃らちよ

「むささたび ひもひつりこれならりしゆ付ひく 十足」と云ふるこれ天文の

比之當時はれきくは婦人も紫革の足袋と云ふる（獨語）我々「我々」考の

中又慶長元和の比生と云ふるの男も女もして寛永比あらと年比盛と云ふる

と云ふ男へ冬革のうらかけ革靴と美服と云ふる女の革乃襪子と云ふる

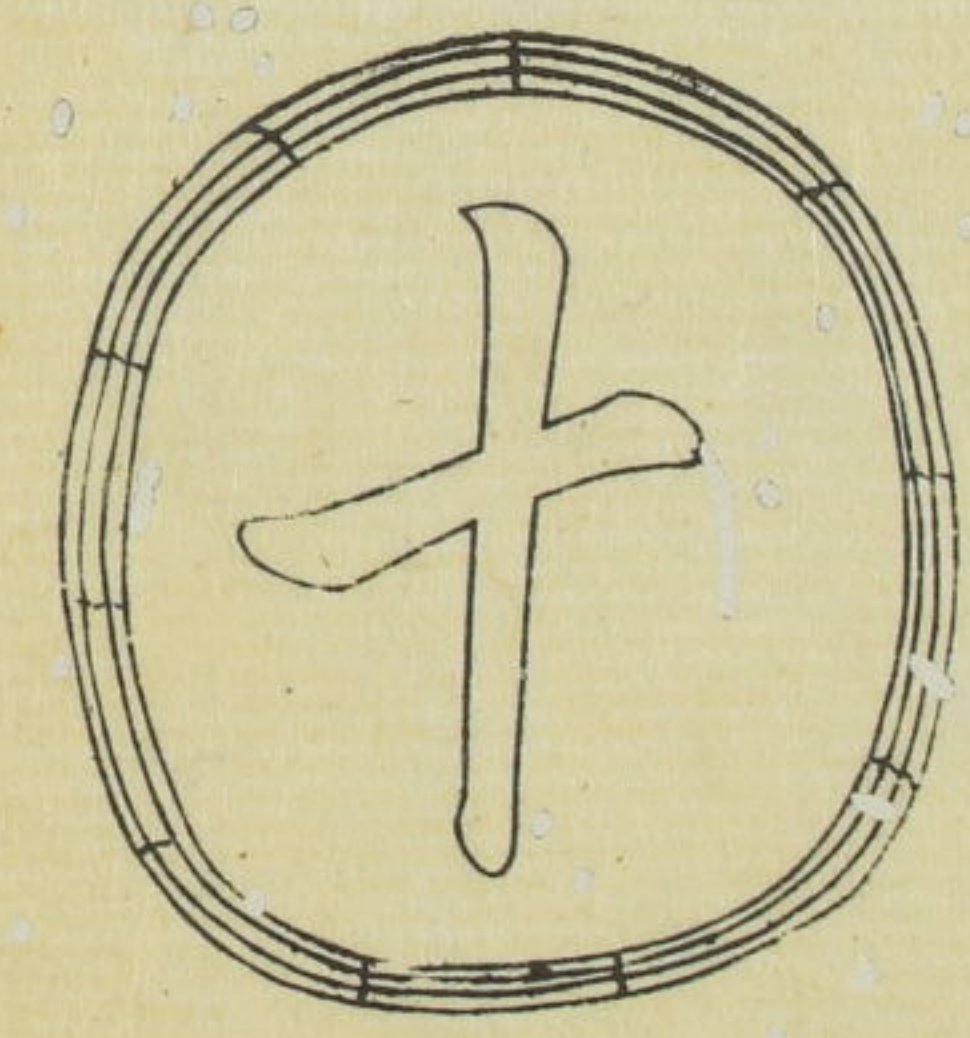
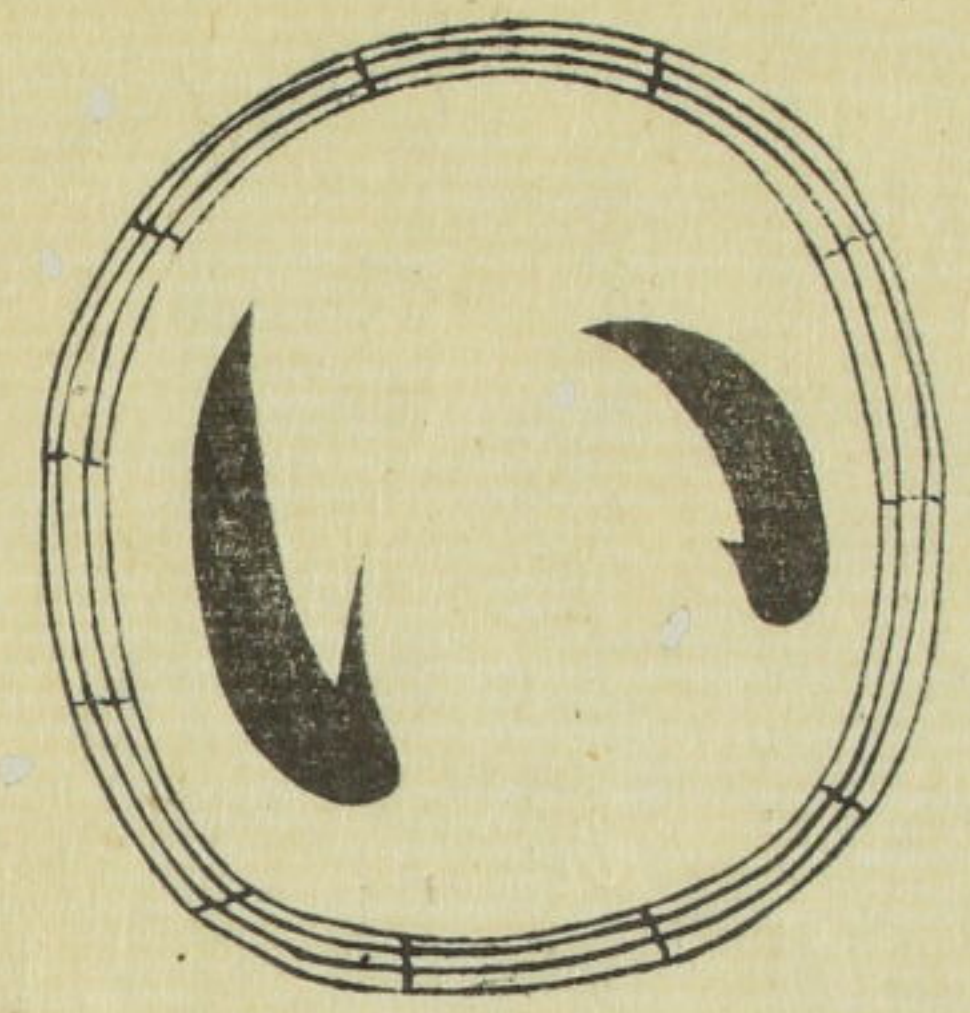
けくひりとりしゆその襪子の我々（天和の）もものりて何なり云々

又右之双紙 慶安二上之巻紫靴物乃云々（童）一人有り云々紫麻子乃

小袖さくくしと紫靴と云々（紫靴）ははらるる云々

「これを寛永慶安比あら

万治寛文の此盛に後江戸三浦屋名妓薄雲君より後其著かたき小袖と卓圍
 につくりく出生此地信州流宿此或寺々寄附し今もあまのり或人其文様を二ツ
 臨しと予よりいへる左にわらんは是又万治寛文此丸の文様此もあまのり
 一ツ證し

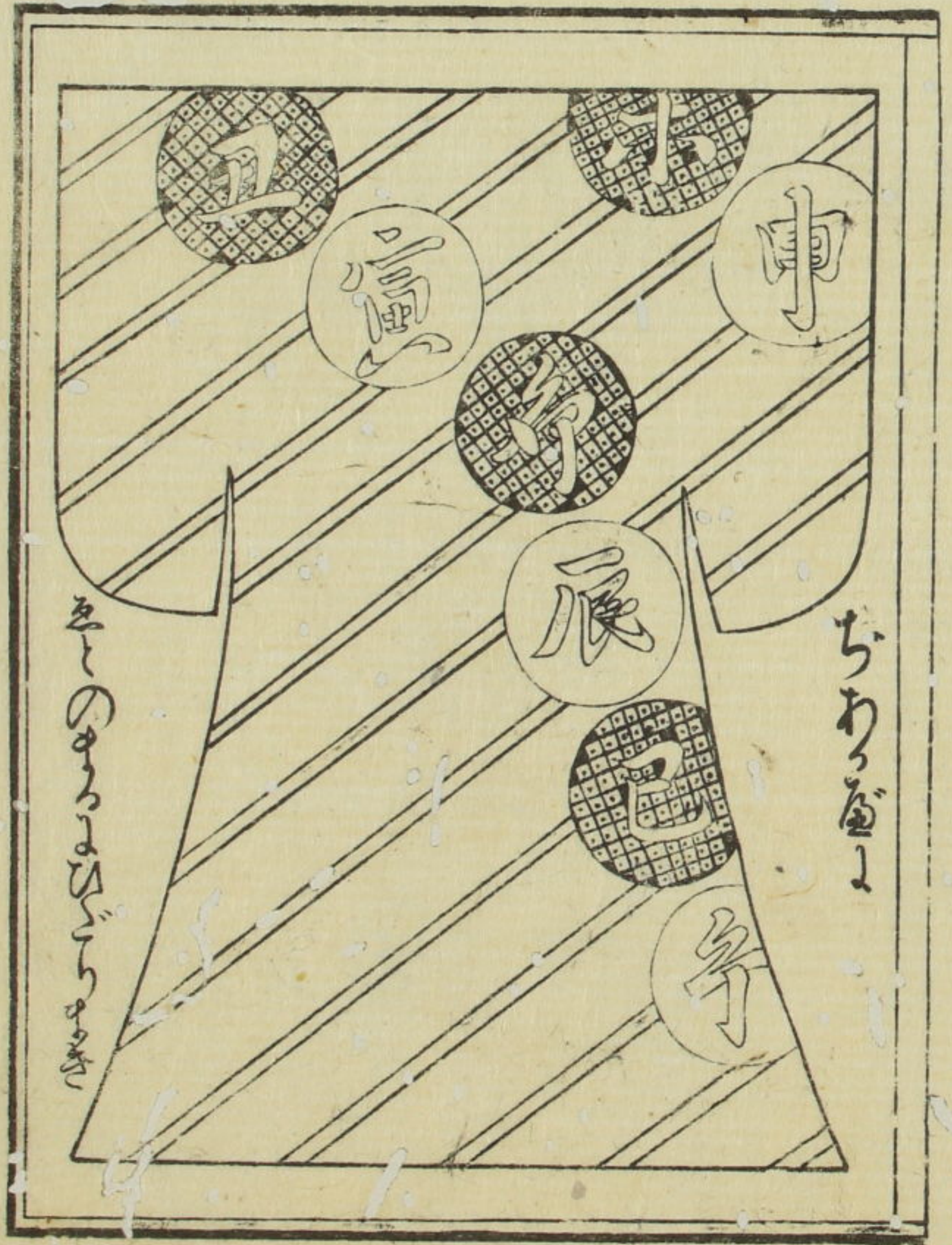


地緋綸子紋紗綾形。總文様丸にふいは四十八文字并ふ一二三九數字を
 り丸の廻り白く深ぬき文字は黒紫萌黄等此色糸とりとぬり丸のぬりのやらん
 金糸とりぬり丸ふ大小異同ありとせ。

丹青上編中九三

丸尽文様雜形二種

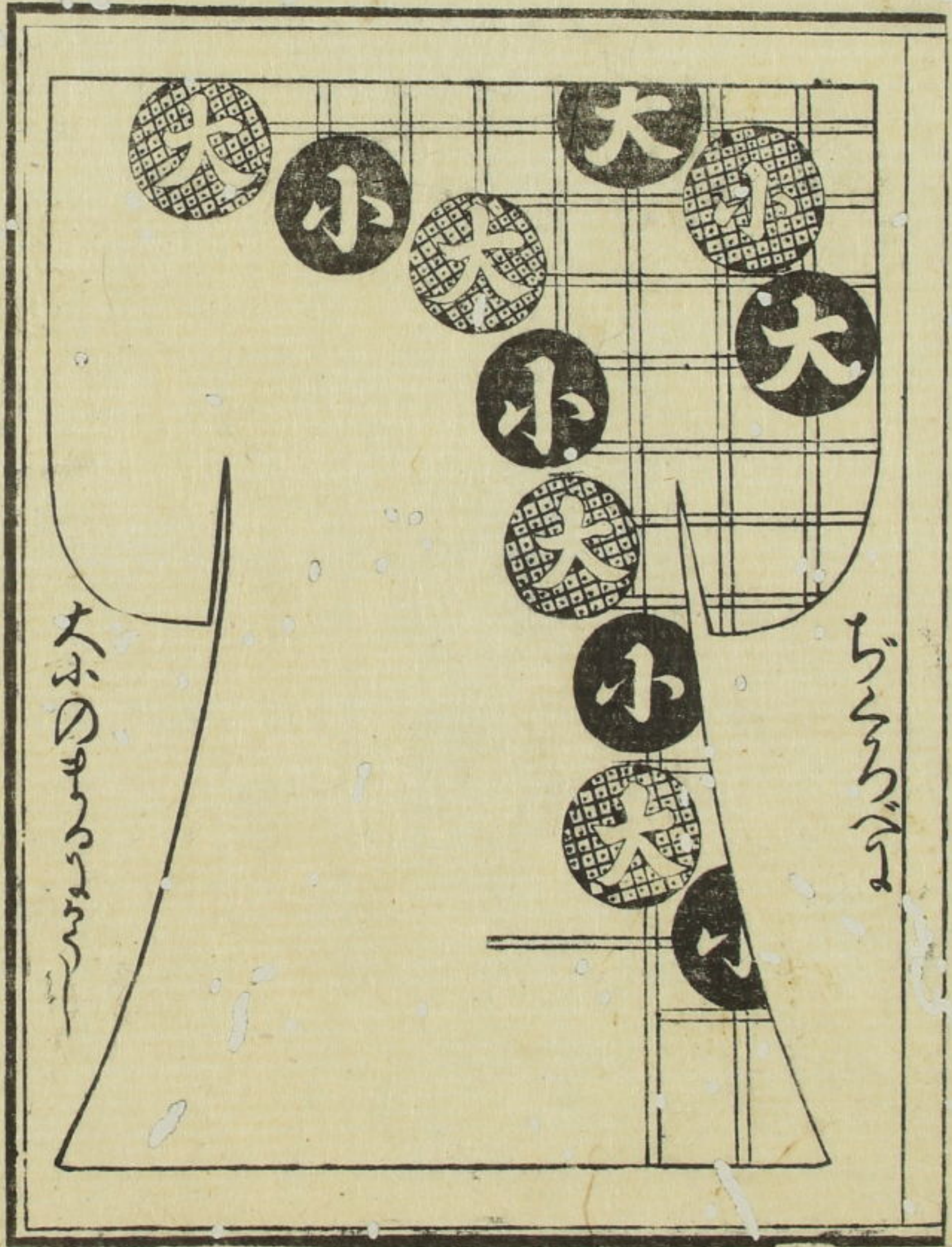
寛文六年
 印本
 新撰雜形
 所載
 瓢水子淺井
 了意ノ序
 あり



同書所載

右に草圖と此雜形と
符合するものと
の流行とをみる

○天和貞享此の印本
女重宝記といふ物の
一の巻に「友禪流れ
九びく一丈に」とあり
これも一證とせしむ



ちんちん

大小のちんちん

○題目踊國時繪香合

総て沃掛地之蓋此画
此繪繪わり大さ
圖此如



按るに是寛永時代古巻より治世修学
寺村或ハ松崎等此題目踊の巻を
一
府に類するたとハ丹前等よりハの之
松の葉一六元柳屋娘四ッ羽帯とたを
一京でハ一糸柳屋娘四ッ羽帯とたを
かけといふも腰カちかやハ一ハ
則是るハ一これハ一ハ三絃此本手
組ハハハの依作り出サ時此歌ハハ
寛永時代ハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ

山東庵所藏

魚を
毛詩
の注又
夫木抄
と考る
野あり

三 菖蒲曹再考。園本曆より前并内侍日記より
四 粉の看板再考。日蓮御書より

五 錢湯風呂呂再考。湯邊の錢湯風呂をわらう風呂と
六 石榴風呂鏡磨再考。諸君の証をわらうたたり。かむ草

七 伊勢の風呂吹再考。引りてお
八 帯再考。衣服令義解 諸王
上臈名事 七十一番
職人尺 一もの

九 豆腐をわらうといふ言。新續犬つが集 おを

十 提灯行灯再考。蓋囊鈔 その外引りて
十一 ぎよらうのちやうらん再考

十二 蠟燭再考。諸君を引りて

十三 伏編笠名義。考証
十四 桔梗笠淺葱松。引りて

十五 浮世御坐再考。和訓登 ようきごの浮世御坐

十六 硯蓋再考。今昔物語に硯蓋の香の交葉子をわらうた。まのふのあつれども民間

十七 硯蓋再考。あつれをわらうた。宝永以後の事。但正のりのよあつれども民間

十八 異制度訓年歴考。い各中よ天竜寺の各あり

十九 無木といふ物の再考。十訓抄 蓋囊鈔 あつれえたる无木簞のことあるを

二十 一二の再考。前よいさるるのたひるる。とりひのころ。再考の

二十一 根本雜事再考。此經の本名の根本説一切有部毗奈耶雜事と云

二十二 卷第十六小猴猴投果の事ありて佛與天受の語あり。義楚六帖の六よ

畧文ありて異同ありて心とれをたご。以外よ再考あつれども

庭訓往まうり前の物ありんこののらら

心ありあつて諸君を考考とて年歴をたご

以上後帙二冊来乙亥春發行

○前帙二巻の引昏ありてらうら草紙繪物語のたひあるれど近古

物ありてらうらものまうらた事まうらめれば。當時を考らたら

ものまうらものまうらた識者の看小あらべたりのあつれどもその昏目を奉

○後帙二巻の引昏を引つれどもとらうられば。それらとらうらるる昏目を奉

- あけらの日記
- 鹽妻鈔
- 無言抄
- 加茂保憲女集
- 名物六帖
- 鋸屑
- 土左日記
- 諸国奇遊談
- 滑稽雜談
- 和漢三才圖會
- 丹後守為忠家百首
- 女用花鳥文章
- 離遊記
- 拾芥抄
- 御傘
- 国朝佳節録
- 雍州府志
- 其袋
- 日本歳時記
- 昔ニ物語
- 五元集拾遺
- 春曙抄
- 婦人養草
- 江家次第
- 古事記
- 世諺問答
- 増山の井
- 文昌雜録
- 五元集
- 續猿蓑
- 女用訓蒙図彙
- 本朝食鑑
- 朱ひくさき
- 異本和泉式部集
- 羊中風俗考
- 日本紀通證 以上五十四種

醒醒老人著 **京傳**

備書
 上卷 嶋岡長盈
 中卷 橋本徳瓶

刷人
 名古屋治平
 鈴木榮次郎

- 骨董集上編 後帙二冊 東乙亥春發行
- 同中編二帙四冊
- 同下編二帙四冊 追ニ出板

加減朱子讀書丸 一包 一匁五分
 ●氣こんをほくくおあふえをくく心腎のきこんをかきこみ
 ●生れつきうく多病の人用て
 ●老若男女あきうく心腎を
 つるいどいん心をつるいんあひのぐら病を生して天寿をそとあふくけはあをうし心腎をあきこみ
 べい旅行したくして益多し
 ●玉石銅印古体近体りてあふ麻むろく石上刻一字
 ●一次次刻一字朱文七分白文五分大印は明あくど
 京山人百樹

山東庵主人著

雜劇考

前編 二冊 古代の雜劇シバを考へめらるゝ
後編 二冊 古画古圖を載り
近刻

文化十一年甲戌冬十二月發行

天保七丙申年季春吉日求版

小傳馬町三丁目

東都書肆 文溪堂 丁子屋平兵衛梓

和漢印章考

京山岩瀬百樹著

全六冊近刻

天保九年

仲の月

らるゝ相



